

文学と情動

—発見としてのプロレタリア文学

中川 成美

文学を読むという行為には、どこかうしろめたさのようなものがある。もつときまとう。文学を読むことは、きわめて日常的な行為である。が、読むという行為を通して誘われる異質の時空間の経験は、文学がフィクション＝虚構という〈事実〉を担保としているにもかかわらず、収まりのつかないざわめく感情のなかに私たちを放り出していく。読了して現実に戻ったとき、知覚は回復しているのに、作品のなかに置き去りにした感情はわずかに震えながら身体の内側に残存し続ける。周りの日常から飛び出してしまった様な感覚は、表面上はその日常に溶け込んで暮らしている顔をしているだけに、何とも居心地が悪いのである。その上、物語内に放置された（もう一人の自分）は、物語の経験という新しいものを得てしまっているだけに、以前の自分のままとはいかず、どこかやましいような感じすら持つてしまうのだ。

勿論、読書行為は限りない満足を与える。ことに優れた文学に出会った時の感動は、いつまでも自分のなかに残り続けていくであろう。それでありながら、現実のなかでは燃焼されえない残滓のようなものに拘って行く時、例えばW・イーザーが唱える「テキストと読者の不均衡」（巒田収訳『行為としての読書』、岩波現代選書、1982年、原著は1976年刊）という言葉につきあたる。イーザーはここで、一般の対人関係では実践的な行動連関によって新たに作り上げられる他者行動の理解が、読書では達せられないと言う。読者はテキストへの自己の投影を矯正しない限

りは、「自分の経験の地平」（同前、p288）に無かったものを経験することは出来ないからだ。しかし、だからこそこの「空白」を補填したいという欲望が生まれる。語られていないこと、自らが経験しないことを、想像力によって補おうとする意志の発生を、イーザーは「ダイナミックな過程の始まり」（同前、p289）と名づけている。

語られなかったことが読者の想像力の中で生み出されるようになる。語られた言葉は、初めに想像したよりも遙かに大きな意味の幅をおびてくる。そのため、とるに足らぬような場面ですら、びっくりするほどの生命力の表現（「人生のもっとも永遠の姿」となってくる。この「姿」はテキストそのものに言葉をもつて示されてはならず、テキストと読者の相互作用の産物である。この文学的コミュニケーション過程は、所定のコードによるのではなく、明示と暗示の弁証法によって始動し制禦される。語られぬことは読者に構成を行わせるインパクトを与えるが、同時にこの構成行為は言語化されたものに支配されている。すなわち、明示されたものは、暗示されたものが形をとるにつれて、別の形をとるようになる。（同前、p290）

イーザーが語る通り、読者がテキストの上に行使する読みの実践は、語られないことを探求する意思の触発によって成立する。だが、それは同

時に言語化されたものによって読者にインパクトを与え、その実践を先に進ませていくこととなる。テキストの上に明瞭に言語化されたことが、その読者の想像力や知覚の再構成で変化するということは、良くわかる。イーザーが主張するテキストの「空白」や「空所」を、読者はどのように補填し、なおかつ別の複雑に絡み合うコンテキストへと変換していくのかということについても、読者は経験値としてよく知っている。

だが、それでもなお、読書行為につきまとう解決のつかなさやどのようか考えていけばいいのか。それは実際に自らが経験する日常行為から遠いということだけではなく、十分に知っているはずのテキスト内空間と共有された場所においても現出するからだ。テキストの解釈をめぐって、様々な試みを仕掛けながらも、実は現実に展開する日常において生きていく生活規範や常識や、通例などといったもののなかで考えようとする。だが、感情の組成とは、そのようなもののなかだけで成立しているわけではない。解くことの出来ないテキストが存在することに、どのようにアプローチしていけばいいのか。胸中にわだかまり、沈潜して、残像のように時々自らの心を苛む、あの感情の出自は一体何なのであるうか。そのようなあまりにナイーブな設問をたてることによって、プロレタリア文学作品を解読してみたい。

1)

日本においてコミニズムが社会的な影響を持つのは1920年代である。大正期の社会主義がマルクス主義の主導的な影響下に入ったのは1918年のロシア革命の成功があったからである。明治末期、1910年前後に盛んとなった社会主義が国家弾圧によって挫折したものの（大逆事件）、大正期のリベリズムやデモクラシーへの関心は、無産者運動

や労働運動を経て、やがてマルクス主義への接近となっていく。「共産党宣言」の翻訳は発禁となっていたが、『資本論』は1918年の生田長江の第一冊翻訳から1923年の高島素之による大鏡閣・而立社版の全訳、また1927年には改訳が改造社から発刊されている。数種のマルクス主義文献翻訳が帝国主義下の国で出版されるのは世界的に見てかなり珍しい現象と言わなければならない。昭和初頭、1920年半ばから1930年前後にかけて、プロレタリア文学が出版界の主流となったことも、また珍しいことである。もちろん、大正末期、特に関東大震災以降の社会主義弾圧は熾烈を極め、1925年には世界有数の悪法である治安維持法が公布、施行された。世界的な共産主義運動への恐怖は、現在のテロ対策に近似しているが、そのために国家は様々な法的弾圧を重ねた。日本における治安維持法の制定は、この中でも最も厳しいものであり、以後の国家による自由主義への弾圧を許容し、ファシズム国家への移行をより容易にしたものとしても一度思い出しておきたい。

ここで何故日本人はこれほどまでにコミニズムに信頼を託したのかということを考えてみたい。1920年代が世界的な転回点であったことは、近代モダニズムの完成として出現した様々な文化現象からも読み解くことができよう。資本の増大と帝国主義的植民地主義によって、暴力的な富の分配が強行され、世界は分断された。社会矛盾は増大して、もはやその極端な不正は限界点へと達していたのだ。1929年に起こった世界恐慌はまさしく、そうした資本の不当な配置が招いたものであるが、何より、世界の覇権をめぐる戦争は総力戦化の傾向を著しくして、やがて第二次世界大戦の圧倒的な拡大へと繋がった。

明治以降、急速に変容した労働形態は日本人の日常世界を変化させた。特に下層労働における、近代労働制度の変換による影響は著しく、近代殖産興業の名の下に強いられた重労働は、人間の尊厳を奪うに十分なも

のであった。貧富格差が常態化して、生活様式における甚だしい重圧は、底辺労働者の生活意識を極めて低下させていくものとなった。

日本プロレタリア文学の初期の作品群が、この労働と生活意識の葛藤を扱っていることに注目したい。もはや、人間の生活条件の最底辺すら確保されない状態は、彼らの生活意識を変化させていく。恋愛や結婚、あるいは家庭生活そのものの基本的な条件そのものが破棄され、失われていったのだ。人間の身体の時間に沿った生活意識は、日常生活の基本的な条件だが、近代科学工業における過酷な労働条件は、彼らの意識を蝕んでいった。この社会と身体の違和が主題として浮かび上がってきたのだ。しかしながら、それは政治と文学という二項対立的な機構に収斂されて、そもそもプロレタリア文学が持ったであろう内的な表現の欲望に対して眼を注ぐことは少なかった。

葉山嘉樹の『セメント樽の中の手紙』（『文芸戦線』1926年1月）はまさしくその意識に貫かれた作品である。セメント樽の中に密かに入れられた手紙には恐るべき事が書かれている。自分の恋人がセメント粉砕機の中に転落して、その身体が破碎されてしまった、この中に私の恋人が封じ込められている、という手紙は、にわかには信じがたい内容である。もちろん、そのような事実を確かめる手段はないから、受け手の松戸与三は答えようがない。なんとも嫌な気持ちになつて酒を飲むしか解決の方法はない。

私の恋人はセメントになりました。私はその次の日、この手紙を書いて此樽の中へ、そうと仕舞い込みました。あなたは労働者ですか、あなたも労働者だったら、私を可哀相だと思つて、お返事下さい。此樽の中のセメントは何に使われましたでしょうか、私はそれが知りとう御座います。

この恋人と称する人間からの問いは、グロテスクである。破碎機の中に転落した恋人が骨も肉も粉碎されてセメントになつてしまふというイメージは、この手紙によつて作り上げられている。イーザー風に言うなら明示された言葉によつて受け手の与三は、その日常を飛び越えたイメージにおののく。この手紙によつて創出される粉々になつた身体、そしてそれがセメントの中に混入されているというイメージに関して、これまで人間が過酷な労働の中で物象化されるメタファーだという解釈が主流を占めてきた。だが、それだけだろうか？これを読み嫌な気持ちになる松戸は、七人目の子供を妻が身ごもっている。粉碎された男の身体と対比される妊娠した女に注目した時、この小説の奥に潜む奇妙な感覚に気づかされる。

男が持つたであろう生きようとする、あるいは恋人を抱きたいという欲望は未発のままにセメントに化してしまった。与三は生きて、男の欲望を代置するように、妻を妊娠させる。それは当たり前な日常の欲望である。だが、与三を襲う奇妙な不安は、何なのだろうか。

松戸与三は、湧きかえるような、子供たちの騒ぎを身の廻りに覚えた。／彼は手紙の終りにある住所と名前を見ながら、茶碗に注いであつた酒をぐつと一息に呷つた。／「へべれけに酔つ払いてえなあ。そうして何もかも打ち壊して見てえなあ」と怒鳴つた。／「へべれけになつて暴れられて堪るもんですか、子供たちをどうします」／細君がそう云つた。／彼は、細君の大きな腹の中に七人目の子供を見た。

与三を急に襲う「何もかも打ち壊して見てえ」欲望は、細君の道理にかなつた日常の言葉に、沈黙を強いられる。通常、憂鬱になつた与三が、妻の現実的な言葉を前にしてやるせなくなつたという場面であろう。だ

がこの唐突な与三の破壊への欲望は、勿論社会的不均衡に対する怒りの表現なのには間違いないが、一通の真偽の分からない手紙によって惹起した与三の変化ははつきりとは描かれない。どこからともなくやってきたその日常を転倒させようとする意志の形は、不明瞭であるだけに不気味とも言える。

与三はちよつと油断すると鼻の穴がセメントで固まってしまうような過酷な発電所建設現場でも、その日の一杯の晩酌を楽しみに、11時間にも及ぶ重労働を耐えていた。いや、耐えるなどという感覚もない。腹の大きい女房と6人の子供を養うには、それしか道はない。その与三に突如萌した「懷疑」が、セメント樽に混入された一通の奇妙な手紙によって始まったことに注目するならば、まさしく与三は読むという行為によって破碎されてしまったのだ。それはセメントの中に破碎された男のイメージを自ら引き受ける自虐的な行為である。だが、手紙の文面によって創出されるイメージを与三がまるまる信じたわけではない。信じるにはあまりに根拠のない話である。与三がこの手紙によって変容したとするならば、知らないうちに与三自身がこの物語の一部に積極的に参加したということに他ならない。与三の自らの身体を通して物語への投企は、何故なされたのか。

葉山に則して考えれば、それは勿論プロレタリア文学運動が対象とする読者に向けられた政治的メッセージとして、この終結が書かれたと解するのが妥当であろう。が、与三がかくもこの手紙に惹きつけられ、打ちのめされる経緯がすつぽりと作品から抜けているのである。セメント樽のなかの手紙と与三という読者の読書行為を、作品として読む私と読者は、この「空白」を補填していく訳であるが、どうにも困ったことに、ここで与三が読んだとされる手紙の奇妙さである。

あなたが、若し労働者だったら、私にお返事下さいね。その代り、私の恋人の着ていた仕事着の裂を、あなたに上げます。この手紙を包み込んでいたのですよ。この裂には石の粉と、あの人の汗とが侵み込んでいますよ。あの人が、この裂の仕事着で、どんなに固く私を抱いて呉れたことでしょうか。／＼ お願いですからね。此セメントを使った月日と、それから委しい所書と、どんな場所へ使ったかと、それにあなたのお名前も、御迷惑でなかったら、是非々々お知らせ下さいね。あなたも御用心なさいませ。さようなら。

一体、この書き手の目的は何なのだろうか。手紙をくれと書いてはあるが、住所は書かれているのだろうか。少なくとも引用された手紙には「女」と称する書き手の名前も所も付されてはいない。しかも、恋人だった男の着ていた作業着の一部で手紙を包むという、気持ちの悪いことをしている。そこには男の汗と体臭が浸み込んでいて、しかもその仕事着で彼女を抱いたと記す「女」のセクシユアルな露悪は、むしろ病的ですらある。恋人の死で精神の均衡を崩したという解釈も出来るが、それでも私はこの「女」が最後に記す一節に恐怖を覚える。「あなたもご用心なさいませ」と脅しの捨て台詞のようにしたためる「女」の屈折した怨嗟のあり方も、この手紙を文面通りには受け取れない何か嫌な感じが漂っている。

『セメント樽の中の手紙』をよむ読者は、与三と共にこの手紙の受容者となつて、手紙の解読を試みることになる。与三を襲う不可思議な暴力への意思は、不意に訪れて、不意に去っていく。想像の中にしか生息しない「女」によって喚起された暴力は、大きな腹を抱えた妻との現実のなかで消えていく。与三に萌した不意なる暴力へのベクトルは、私たち読者と共有されない。何故なら与三が手紙に見せた反応は、作品だけで

はまったく不明であるからだ。与三が示したのは、彼が住む世界が揺らいだということである。そのことに動揺しながらも、彼がこの「女」を信じようとするのは、与三が信じなければこの「女」は存在しなくなってしまうからである。テクストの虚構性を支えるのは、一方に読者がその虚構を信じるからである。与三は、このどこか可笑しな手紙を信じようとする。根拠のない暴力を身体的な要求として開示することによって、この「女」、そしてセメントになった「男」を現実の中に位置づけようとしたときに、与三のどこにも持っていない怒りは発話されるのである。それは勿論、社会的な覚醒である。しかしながら、ここで注意したいのは、社会的覚醒が先にあるのではなく、身体を通して感知される、少しも理論化できない感情の組成をもって、すべてが開始されるということである。

イヴ・セジウィックは“Touching Feeling Affect, Pedagogy, Performativity” (Duke Univ Press, 2003) のなかで興味深い論を展開している。例えば食べたり寝たりといった生命を維持していくための身体的欲求 (Drive) と、生命維持にはあまり関係しないが身体の反応として外部に呼応して活動するような情動 (Affect) とは、一般にはアフエクトがドライブに従属しているように思われがちだが、それは違々と述べている。それらは二項的に対立しているわけでも、また混淆しているわけでもない。即ち、目的が違うのである。ドライブは生命を維持していくために、その欲望の対象と目的ははっきりしている。それに反して、アフエクトははっきりした方向性をもたず、様々な行動を引き起こしていく複雑な構造をもっている。決定的な二つの違いは時間である。ドライブは時間と緊密な関係をもつが、アフエクトは時間に束縛されていない。例えば、動機のない怒りがわき起こってきて、それはいつまでも持続したり、一瞬で消え去ったりする。だが、ドライブは食事をして空腹を満た

せば、そこで行動は終わるし、寝るといふ行動も必ず目覚めという終結をもつ。

フロイドは性欲を人間のもっとも大切な行動起因として、ドライブに位置付けたが、最近の情動理論では、むしろアフエクトに位置付けられている。性欲の発信は、生物学的、身体的な本能的欲求と解釈されがちであるが、実はその行動の端緒はより複雑な構造をもっている。『セメント樽の中の手紙』で、与三にもたらされた暴力的な欲望は、行動として行使用されなかったが、その発露の部分に、手紙によって引き起こされた与三の身体の再認知が布置されていたのである。それは「粉碎される身体」というイメージと、その身体を包んでいた布のセクシュアルな記号性によって、与三を呼び覚ましていった。勿論、イメージの出処は与三であるから、それはあくまで与三の内部で想起されたイメージの重なりを出自するべきであろう。だが、セジウィックは、そうしたイメージが言語の枠組みの下にある非言語的現象をも動員して形成されていることに言及する。言語と非言語的現象との境界線は無限に変化しているのであり、与三のイメージを支える手紙 (言語) は、実はその中で無限に生産され続ける非言語的現象によっても構成されているのであり、与三はそうした外部の刺戟を自らの内部のイメージと接触させながら、複雑な改訂を際限なく持続させているのである。アフエクトはその意味で確かな出処や出自をもたない。イーザーがテクストの「空白」や「空所」と呼ぶテクスト上の欠損は、実はアフエクトによって満たされ補修され、補われることを待っているとも言え換えられよう。

葉山がプロレタリア文学を書く出発点に据えたのは、このような言語によって生産されるイメージとは一線を画するものであった。言語が身体と接触しながら、非言語的なイメージ (動態) をも動員して、読者のアフエクトを引き出そうとする力であった。逆に言えば、プロレタリア文

学は、その期待の地平から生まれたとも考えることは、十分に可能だ。

2)

葉山の出世作『淫売婦』（『文藝戦線』、1925年11月）は、名古屋刑務所に収監中に書かれた葉山の出世作である。この作品もまた『セメント樽の中の手紙』と同様に、ある種のあざとさがある。あざとさは、小説の言説内容に信頼がおけないということである。それはシュールレアリズムに近い方法とも言い換えられる。ここでも葉山は物語内のねじれた視線の交差を、一種の読書行為に近いものとみなしながら、作品を構成している。勿論、そこにはその異様さゆえに成立するアフエクトの介在がある。そしてこれを読む私たち読者は、空白となった叙述されない部分に、虐げられた身体の鬱屈と、それゆえの自由を感知するのである。葉山自身も、拘禁される身体を抱えたままにこの小説を起草し、刑務所内で完成させた。この小説の冒頭は次のように始まる。

若し私が、次に書きつけて行くようなことを、誰かから、「それは事実かい、それとも幻想かい、一体どっちなんだい？」と訊ねられるとしても、私はその中のどちらだとも云い切る訳に行かない。私は自分でも此問題、此事件を、十年の間と云うもの、或時はフト「俺も怖ろしいことの体験者だなあ」と思ったり、又或時は「だが、此事はほんの俺の幻想に過ぎないんじゃないか、ただそんな風な気がすると云う丈のことじゃないか、でなけりゃ……」とこんな風に、私にもそれがどっちだか分らずに、この妙な思い出は益々濃厚に精細に、私の一部に彫りつけられる。

一人の若い船員が誘われるままに売春婦の元に行く。倉庫のような建物に女は全裸のままに横たわっている。顔の周りは吐瀉物で汚れ、体からは腐臭が漂っている。明らかに重病の女を売り買いする男に義憤を感じた主人公は彼らに殴りかかる。この女を助けなくてはならない。若い男は一途にそう思う。ところが女は余計なことをするなど制する。彼らが彼女を養って保護してくれているのだから、私は十分である。静かにしてくれるのが一番である、女は訴える。男たちは決して女に触れない。全裸にした女を客に見せて同情を買うのが目的なのだ。

ここにも葉山が持つセクシュアリティに関する不思議な感覚がこの作品を特異なものとしている。全裸に剥かれた娼婦が性交の対象としてではなく、憐れみの対象として存在するこの「倒錯」は、これまで不当な性労働や女性暴力への告発という解釈が施されてきた。しかし、ここに展開する情景そのものが冒頭で主人公が語るように「幻想」なのか、現実なのか混濁していることに注目するならば、およそ「商品化」されえないこの女性を、娼婦とすることの曖昧さなのである。肺結核と子宮癌にかかった娼婦という設定自体が、もはや成立しえないのだが、あえてこの造形を押し通すことによって現出する性愛の可能性こそが、ここでは焦点となる。性愛を目的とする娼婦が、性愛の可能性を立証するところ、ここに葉山が持つ複雑に絡み合う不可思議な感知への関心が導き出されるであろう。それは性交にしか帰着しない男たちの欲望を嘲笑い、女性が性交によって被る社会的な非難を無化する。しかも、娼婦という軽蔑されるべき存在が、一種の受難者として聖化される顛倒のあり方にこそ、この小説の解説の要諦はある。

この小説を読むという行為は、幾重にも自らの認識を飛び越えていくことになるだろう。何故ならこの小説の最後に船員は、あまりの女の悲惨に同情して「ポトリ」と涙をこぼす。だが、その直前に船員は「淫売

婦」を「殉教者」と呼んで、彼女を養う男たちへの認識を変える。この唐突な展開は短編小説だけにどこか作り物めいた感じが否めない。

「お前は どう思う。俺たちが何故死にまわらないんだろうと不思議に思うだろうな、穴倉の中で蛆虫見たいに生きているのは詰らないと思うだろう。全く詰らない骨頂さ、だがね、生きてると何か役に立ってないこともあるまい。いつか何かの折があるだろう、と云う空頼みが俺たちを引っ張っているんだよ」／私は全つ切り誤解していたんだ。そして私は何と云う恥知らずだったろう。／私はビール箱の衝立の向うへ行つた。そこに彼女は以前のようにして臥ていた。／今は彼女の体の上には浴衣がかけてあった。彼女は眠っているのだろう。眼を閉じていた。／私は淫売婦の代りに殉教者を見た。

この急速な船員の変化の凡庸さに比べ、女のある種のしたたかさは際立つ。船員が自分のために男たちをいさめてくれたのを見て、伝法な調子で船員をたしなめる。「小僧さん。此人たちは私を汚しはしなかったよ。お前さんも、もう少し年をとると分つて来るんだよ」と、船員を責める女は、明らかに被害者であることをやめて、自立した人間として船員に対等に対峙する。ここで読者は気づくだろう。彼女はこのように扶養されることに引け目は感じながらも、自らの役割を引き受けて、その範疇でプロであろうと徹する。だが、船員にとって、彼女は可哀そうな娼婦でなければならぬし、そうであることによって自らの正義は行使されるのだ。この子供のようなナイーブな感性に、女は笑っている。「小僧さん」と言う呼びかけに込められた意図を、船員は理解していない。それを読み取った『淫売婦』の読者は、この小説の滑稽さに気付いていく。目を閉じた女はおそらくは寝てなどいない。彼女なりのパフォーマンス

ビティを完遂するために、病んで寝込む娼婦を演じる。この小説にすつきりとした終結は来ない。どことなく居心地の悪い思いのままに放り出されてしまう。その欠損を埋めていくのは、アフエクトの力であろう。

必然的な文字通りの生命維持を図る娼婦のドライブと、その悲惨な「展示」にナイーブに反応する客＝船員のアフエクトは、ここで交差して別の物語を語り始める。それが冒頭に付された船員の感慨である。10年にわたって、彼のアフエクトはしっかりと「淫売婦」の残像を保持し続けているが、女のことは一切書かれない。死んだとするのが船員にとってはもつとも都合のいい感情の収め方であるが、もしかするとピンピンして各地を同じように回って稼いでいるかもしれない。こうした関係の不可能性こそが、この小説の主旨であり、情動（アフエクト）によって派生する別の人生や物語を想像するよすがとなつて、読者主体と作品の関係を新たな地平に誘っていくことになる。

3)

女性プロレタリア作家の作品を読むとき、そこには高い比率で妊娠と出産の問題が取り上げられていることに気づかされる。そこで恋愛や結婚ということは語られない。かつて平野謙は共産党のハウスキーパー問題をとり上げ、特に小林多喜二の「党生活者」を告発した²⁾。偽装夫婦として地下抵抗運動をする男性共産主義者が、女性を性的奴隷、また家事労働者としてしか見えないという彼の主張は、非人間的な党の制度を批判するのに十分な説得力を1970年代に持った。しかしながら、果たしてこの告発は正しかったであろうか？

ここには明らかに近代家族制度に則った男女ジェンダーの規範が、通俗的道德と一緒になつて女性自身を抑圧している。確かに運動に参加す

る女性に対してドメスティックな仕事しか与えずにいるのは、男性中心的な横暴であろう。しかし、彼女らを「哀れむ」心の中に、女性が守るべき「貞操の破棄」や、幸福な結婚生活からの「逸脱」に対する嫌悪が介在しなかったであろうか？そうした男性が持つ保守的な倫理観が、このハウスキーパー事件への批判として機能していないだろうか？

この時期のプロレタリア女性作家は極めて自覚的に、その保守的な男性の視線に抵抗していたと私は考える。彼女たちが現実の問題として、妊娠や出産に立ち向かう時、それこそは自らの身体が社会においてどのように抑圧されているかについてを、作品を通じて告発した。

平林たい子の出世作『施療室にて』（『文藝戦線』1927年9月）は熾烈な作品である。治安維持法で東京を追われた若い社会主義者のカップルは流れるままに朝鮮半島を経て関東州にたどり着く。旅順は日本の純植民地であり、若い夫はそこで無謀なピラマキで逮捕・収監されてしまう。妊娠していた妻は仕方なく無料の施療病院で子供を産み落とす。彼女は妊娠脚気にかかっており、その母乳は子供にとつて命取りになる。だが、彼女に人工乳を買う金はない。泣き叫ぶ子供に負けて、仕方なく彼女は母乳を子供に与える。

恐しい勢で乳汁が流れ出す。乳の張る痛みが、朝になると肩まで遡つて来た。体の一部に膿をもつてある気持だ。夜中に三回子供に乳首をふくませたが、舌と咽喉の吸引力が快く乳首から乳汁を誘い出す。乳を吸われてゐる気持は、軽い睡気に擲擻されているようで快い。

ここでたい子は授乳という行為を通じて、そこに生じる身体的な快感を描写する。それはおそらくは「母性」という言葉で表現される感覚かもしれない。しかし、身体に埋め込まれた「膿」のようなものが子供によつ

て吸い出されていくというイメージのねじれた表現について、もう一度考えていくべきであろう。それは身体的な快感でもあるのだ。膿が吸い出されることによつて到達する「浄化」は、「軽い睡気に擲擻されている」ような快さとして、主人公の身体的知覚に記憶される。性的快感に近似した感覚の中に、主人公はどっぷりと浸かり込む。子供が可哀想だから、やっつけてはいけない母乳を与えるというこのシーンの意味は、主人公のこの快感の中で意味づけが変更される。深い性的な満足に似たものが、この母乳を与えるというシーンには描かれているのである。男を必要としない身体的な快感が、ここには提示されている。

やがて子供は死ぬ。主人公は立つこともできずにその遺骸を見ること が叶わない。布団の中で彼女は、子供が安置される死亡室のトロトロと流れる水道の音を、子供の顔を思い出す代わりに想起する。この不思議な終末部分が表現するのは、諦観だけではない。子供と取り交わした身体ドラマをここで追想しているのだ。トロトロと流れる水道の音が、心地よく彼女の感覚を駆け巡って、彼女を子供の死の悲しみから救っている。

この時期のプロレタリア女性作家に共通するのは、決して自らを被害者として哀れもうとする視点が極めて少ないことだ。自らの悲哀は文学的な素材として活用されるはずである。だが、彼女らは敢えてこの「自己憐憫」を否定する。たい子が『施療室にて』で見せたのは、自己の存在を身体から再発見する態度であった。平野謙は「平林たい子論」（『群像』1951年8月）の中で、このたい子の態度を「強烈な自己肯定欲」、あるいは「女性固有のエゴイズム」と称した。この時代の男性批評家の限界もあるのだが、平野に見え隠れするたい子へ対する「辟易」となる感覚は、この「自己肯定欲」を「女性特有」の性質として斥けることによつて、どうにか理解をしようとしている。だが、平野は明らかにこの

身体に兆すたい子の懷疑を理解しないし、しようもしない。被害者と自己規定すれば楽な道であるという男性の横暴な視線がたい子に注がれている。だが、決したい子は自らの内部に湧き上がる欲望を否定しない。男性にとつてこの女性の欲望は忌まわしいものであり、否定されるものである。殊更に平野が強調する女性一般からいかにたい子が離れていて特殊かということを理由に、優れた作家であると評価する「転倒」は、理解できないものに対する排除の意思が反映して、制度としてのジェンダーに背馳するものを抹殺しようとする男性の意識が色濃く感じられる。ジェンダーによる読解の違いは、読書行為が全く違った他者の発見であるにもかかわらず、やはり色濃くジェンダーによって分別された「読みの制度」が働くことを証明している。つまり、イーザーの言う「空白」や「空所」の補填は、ジェンダーによるバイアスがかかる可能性が高いということを示している。そこで、セジウィックが言う情動（アフェクト）という切り口で、そうしたジェンダー・バイアスを保留しながら、多用な読みの可能性を試行することの意味が発見される。すなわち、そこで露わになった「相違」をこそ、読解のツールに転化していく方向が考えられるべきであろう。

松田解子^{トキコ}は「産む」（『読売新聞』1928年6月4日）と「乳を売る」（『女人芸術』、1929年8月）で、鮮やかに下層労働階級の女性を持つ身体知覚を描きだした。それは同時代の女性が強いられる身体的な禁欲と社会的馴化を打ち破るものであった。「産む」は、貧困な夫婦が妊娠という不測の事態に打ち当たる話である。夫は育てていけるかを心配して、それとなく墮胎を匂わせる。彼女は「うんと働いて育てるから」と産むことを決心するが、心の中ではある「残忍な思い」を抱えている。

強烈な毒をのみくだす一人の妊婦が、ふとんの下に赤子をふみつぶす

一人の母親が、まざまざとかの女の眼のうらに映った。

ここで松田が提示したグロテスクな子殺しのイメージは、懊悩の中にあるこの妊婦が抱え持った身体感覚である。踏み潰される赤子は血みどろの物体と化すイメージは、彼女の内面を変化させていく。ある雷鳴のとどろく夜、彼女はこう感じる。

あたかも一つの、あたらしい世界をはじめのために、てつていな破壊をもくろむ魔神が、巨大な暴力をふるっているかのような夜を。そして、ちから強く、自分の腹壁を内部から蹴る胎児を意識した。やがて血みどろの苦悶のなかからうまれ出るはずの、ひとつの生命を。

この妊婦の変化をこれまでは母性の自覚というふう解釈されてきた。だが、明らかにここには内部に抱え持った血みどろの胎児が、彼女に身体記憶を呼びかけるという構図が成立しているのではないだろうか？松田は続く「乳を売る」でも、この身体知覚の変化を描いていく。生活に困窮した主人公は、資産家の家の乳母となることを決心する。病弱な主人の息子は、二人の乳母の乳で命を繋いでいる。だが、主人公は主人の息子に母乳を与えることで、自分の娘に十分の乳を与えることができ、ない矛盾に苛まれている。この屈辱的な乳を絞る労働の最中にこのようなことを思う。

乳腺は、薄紅色を呈した乳房の表皮を青々と浮かび上って、苦しいばかりに張ってくるのをぎゅっとなつかんでおししほと、わずか直径半センチほどの乳首から十数本の乳条が、精巧なポンプからのように噴出する。そのあいだは不思議な快感があった。

リア作家たちが見出した日常との齟齬に根差す懐疑は、かように多様な表現を発見した。コミニズムを政治の問題のみに収斂させてはならない。コミニズムが日本にもたらしたものは、このように日常を覆う文化状況を再検討して、そこにジェンダーや性意識の規範によって隠されていた豊かな表現を発掘していったのだと思う。それは具体的に恋愛や婚姻、妊娠や出産という「日常的行為」に別の光をあてる作業ともなった。特に女性作家にとって、この視点の獲得は自らの性や身体を自らの問題として見出すこととなった。そのことこそが、ジェイムソンの言う「政治的無意識」を剥出していったのだ。プロレタリア文学における「政治と文学」とは、この気づきの行程にある関門である。これらは分離してはいない。一元的なものである。情動（アフェクト）はここで働く。見えないものや書かれないことを想像すること、そして思考されざるものや語られざるものを探求することでしか感知されない文学の根幹的な力について考える時が、今到来している。

終わり

註

- ① 例えば津田孝の「労働者の生命を血の一滴まで残さず奪いつくす資本主義的搾取の本質を見事に形象化している」（解説『葉山嘉樹集』日本プロレタリア文学集・8、新日本出版社、1984年）というような評に典型的にみられる。
- ② 平野謙「小林多喜二問題」（『群像』1976年4月号）で、『党生活者』における笠原の表現の仕方を「人間蔑視」として、多喜二を批判していた。

（本学名誉教授）